

「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発
—「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信—

The Development of Education Program
for the Cultural Folklore and for the Transmission of “Kimono” Culture
—Learning Experience of How to Wear a “Kimono” and Transmission to Foreign Countries—

薩本 弥生^{*1+}, 川端 博子^{*2+}, 堀内 かおる^{*1+}, 扇澤 美千子^{*3+}, 斉藤 秀子^{*4+}, 香山 委佐子^{*5+}
Yayoi Satsumoto^{*1+}, Hiroko Kawabata^{*2+}, Kaoru Horiuchi^{*1+}, Michiko Ougizawa^{*2+}, Hideko Saito^{*4+}
and Isako Nomiyama^{*5+}

*1 横浜国立大学教育人間科学部 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台79-2
Faculty of Education and Human Sciences, Yokohama National University79-2,
Tokiwadai, Hodogaya, Yokohama 240-8501, Japan

*2 埼玉大学教育学部
Faculty of education, Saitama University

*3 茨城キリスト教大学生生活科学部
College of Life Sciences, Ibaraki Christian University

*4 山梨県立大学人間福祉学部
Faculty of Human and Social Services, Yamanashi Prefectural University

*5 大妻女子大学短期大学部
Junior college division, Otsuma Women's University

⁺ 服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学
Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture,
Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract : As the “Kimono” culture of Japan is not enough understood among the young Japanese, it is necessary to consider how to transmit the “Kimono” culture to the young generation. Many foreigners are highly interested in Japanese culture. Therefore it is necessary to examine how to show and explain the traditional culture of Japan. With a diverse background concerning “Kimono” culture, the purpose of this research is to develop an educational program to teach a “Kimono” culture as a folklore and then to transmit the information to the world. We focused especially on “Yukata” and plan to develop an experiential type of education program including how to wear a “Yukata”. This year we started developing digital teaching m

aterials (how to wear and how to fold “Yukata” for men and women) both in Japanese and English version. We also started developing the class practice at Yokohama junior high school (Yokohama National University, Department of education and human sciences). In United Kingdom, we conducted 1) the

* 1) satumoto@ynu.ac.jp

questionnaire survey of Japanese culture, 2) practicing how to wear “Yukata” by using DVD we made, 3) evaluating the DVD, 4) the questionnaire survey of feeling after dressing “Yukata” for university students and working people by cooperation the local Japanese association and co-researcher Mr. Zanker (PGCE/MSc Design and Technology Subject Leader of the Loughborough University in Britain).

はじめに

日本の「きもの」文化は、これまで日常着として、あるいは“はれ”の場の衣服として日本の生活や自然と関わりながら育まれてきた伝統文化の一つである。同文化は、「きもの」の染色、織、縫製、着装に関わる技術に支えられ形成されてきたが、日常着が洋装化し既製服が普及した今日、これらの技術や文化が若者に理解されなくなりつつある。一方、2006年に教育基本法が改正され、「伝統や文化を尊重し、我が国と郷土を愛するとともに、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が新たな教育の目標として規定された。この規程を受け、2008年3月の学習指導要領告示では、国際社会で活躍する日本人の育成のため、我が国の郷土の伝統や文化を受け止め、それを継承、発展させるための伝統や文化に関する教育の充実を図ることが求められている。そして、中学校の技術・家庭科の衣生活分野では「和服の基本的な着装を扱うこともできること」が盛り込まれた。すなわち、日本の伝統文化である和服について着装も含めて理解するための教育、すなわち「きもの」文化をどのように教育していくかについての検討、新しい教育デザインが必要となってきた。また、政府の施策の元、全国規模で外国人観光客が増加傾向にあり、情報のみならず、人やモノの移動を含むグローバル化が進んでいる。外国人の日本文化への関心は高く、日本の文化を世界に発信する機会が増え、文化の相互交流はさらに進むと考えられる。しかし日本の伝統文化をどのように伝えていくか、その方法についての検討もこれからといえる。

このような「きもの」文化をめぐる様々な状況を背景に、本研究では、家庭科の授業の中で「きもの」の中でも最もカジュアルで身近である浴衣の着装を含む体験的学習を通して日本の「きもの」文化を次世代に伝承することを意図して、教育プログラムの開発と授業支援を行うことを目的とする。それらの実践を通じて子供たちの心に日本の「きもの」文化を尊重し継承・発展させようとする芽を育てていく。また、グローバル化に対応し、外国の中学校での浴衣の着装を含む体験的授業実践を通して日本理解と文化交流の促進に貢献していく。

研究方法

本年度は、以下の内容に着手した。各々の研究方法について、以下に概要を述べる。

1) 授業研究用教材としての浴衣の着装およびたたみ方のDVD作成

着装DVDの作成は、和裁を専門とし着装を含めて長期にわたり教育・研究を行ってきた分担者(呑山)を中心に、以下の手順で行った。平成21年7月に、大妻女子大学のビデオ収録スタジオにおいて男女ひとえ長着(浴衣)



Fig.1 浴衣の着装ビデオおよび編集作業風景

の着装の仕方、女子のみ、たたみ方についても撮影を実施し、8～9月に日本語版、英語版ナレーションの吹きこみを行い、9～10月に編集を行い、男女浴衣の着装・たたみ方のDVDを完成させた(Fig.1)。

2) 浴衣を題材とした「きもの」文化についての「テーマ学習」教材の作成のための準備

本年度は、浴衣に焦点を絞った「テーマ学習」教材の作成準備のため、浴衣に関わる服飾関連の文献資料の収集を行った。着装方法に関するテキスト教材作成用に男女別浴衣の着装イラストの作成をイラストレーターに依頼、3回の打ち合わせを経て、完成させた。また、文化服飾博物館に依頼して、同館所蔵の浴衣について写真撮影、寸法採集を行った。さらに、ゆかた生地の産地や工程に関する教材作成のための取材として2月に浜松市の浴衣の「注染」染め工場の見学を行った。

今後、教材作成に向けて、色、模様、染め方、歴史など、「テーマ学習」の内容を吟味し、受講年齢にあっているか、日本の伝統文化を伝えることができるか、実際の着装の仕方の図示の方法などを検討する。また、わかりやすさを重視し、重要な図表にはイラストレーターを起用し、生徒の興味を喚起する等の工夫を図る。

3) 浴衣を題材とした「きもの」文化についての教材のデジタル教材化

上記「テーマ学習」教材をe-learning教材として活用するため「着方が分かる」「たたみ方が分かる」「産地が分かる」「縫い方が分かる」を切口としたホームページの作成に着手した。

本年度は、1)で作成したDVDを元に「着方が分かる」「たたみ方が分かる」の部分を見たい所から見られるようにすること、ビデオから抜粋した写真や2)でイラストレーターに作成を依頼した静止画と同期させ、よりわかりやすく、使い勝手が良いようにすることを目標に再編成に着手した。今後、横浜国立大学教育人間科学部マルチメディア文化課程のスタッフに委託し、e-learning教材の充実を図る予定である。

4) 浴衣を題材とした日本での授業研究の協力校の選定と予備的研究授業の実践

浴衣を題材とした授業研究の一環で、7月から10月には協力校の一つ、横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校において葛川幸恵教諭に授業実践を依頼し、授業研究に着手した。

第2学年対象の授業では授業前に①浴衣やきもの「文化」に関する意識調査を行い、授業で着装に関するビデオ(本年度は、作成DVD未完成時の授業実践のため、市販のものを使用)を見た後に②浴衣の着装・たたみ方ビデオの分かりやすさの評価を行い、たたみ方と着装の各授業後に③浴衣のたたみ方、着装の仕方に関して興味・関心、理解度、習熟度に関する調査を行った。

第1学年対象の授業では6、7月に被服の役割・自分らしい着装について学んだことを踏まえ、洋服とは異なる和服の特性について授業を受けた後、実際に浴衣の着装を行い、たたみ方の学習をした(Fig.2)。



Fig.2 研究授業の様子

授業実践の内容を踏まえ、家庭科教育を専門とする分担者(堀内、川端)により指導案のマスタープラ

ンを作成し、それを元に協力校となる千葉県立流山南高等学校教諭の仲田郁子氏との打ち合わせを行い、教材内容について検討するとともに、現場の実情に合わせて指導案の刷り合わせを行った。今後は、協力校の候補に次年度の授業実践を要請し、授業実施に向けて準備を行う。

5) 海外への「きもの」文化発信のための教育プログラム開発の準備

10月には海外での授業実践の準備としてイギリスのラフバラにおもむき、日本人会篠沢久二子氏および、ラフバラ大学Design & Technology DepartmentのNigel Zanker氏の協力により、現地の大学生および社会人対象に授業研究の準備段階として浴衣着装のワークショップ (Fig.3) を行い、①日本の伝統文化に関するアンケート、②開発した英語版着装ビデオを用いた浴衣の着装体験、③浴衣の着装・たたみ方ビデオの評価、④着装後の着装感についてのアンケートを実施した。また、イギリスでの授業実践の協力校の選定および授業実践のための打ち合わせを行った。なお、着装ワークショップの様子は、以下のラフバラ大学のホームページで紹介されている。今後、これらの実践をふまえ、
 中学校での浴衣着装の授業実践に向けて準備を行う。



Fig.3 イギリスでの浴衣の着装ワークショップ

http://www.lboro.ac.uk/service/publicity/news-releases/2009/142_JapaneseTeachers.html

6) 浴衣着装の研究授業用浴衣の必要サイズの検討および浴衣と小物の調達

中学生および高校生を対象にした授業を想定しているため、中学1年生から高等学校の3年生までの男女の身長を社団法人人間生活工学研究センター(HQL)の調査結果から調べ必要な浴衣のサイズを検討した。その結果、Table 1のサイズ展開で用意することにした。特に、男子用の浴衣は、おはしよりがなく、身丈が着丈となる対丈のため、身丈に応じた浴衣の調達が必要である。中高生の身長の伸びが顕著であることから、20cm以上の身長差に対応する必要があることが分かった。XS、SS、Sサイズは(各々、身長150cm、155cm、161cm相当)、市販品がなかったため、次年度に仕立てを業者に委託する。着装には男性用腰紐として男締めを用いる。角帯とセットにして、浴衣と一緒に1人分ずつ袋詰めした。女子用の浴衣に関しても半幅帯、伊達締め、腰紐2本、前板と一緒にセットし、袋詰めした。今後、M、LLサイズを調達する。

次年度の授業研究の際は、クラスの数、男女比、サイズに応じて、この中から必要なセットを用意し、協力校に運搬する。

Table 1 浴衣のサイズ表

	サイズ	数
女物	S サイズ (身丈 150cm)	10
	M サイズ (身丈 158cm)	0
	L サイズ (身丈 164cm)	11
	LL サイズ (身丈 170cm)	2
男物	XS サイズ(身丈 125cm)	0
	SS サイズ (身丈 130cm)	0
	S サイズ (身丈 135cm)	0
	MS サイズ(身丈 140cm)	5
	M サイズ (身丈 142cm)	7
	L サイズ (身丈 145cm)	10
	LL サイズ (身丈 150cm)	14

結果および考察

ここでは本研究の目的に沿った研究の進捗状況について、その結果と考察を報告する。また、結果の一部として、中学校での研究授業のアンケート調査の一部について報告する。

1) 本研究の目的と研究の進捗状況について

本年度は、本研究の「浴衣の着装を含む体験的学習を通して、日本の「きもの」文化を次世代に伝承することを意図して、教育プログラムの開発と授業支援を行うこと」という目的のために、浴衣の着装およびたたみ方の日本語版 DVD 作成を行った。また、浴衣を題材とした予備的研究としての授業実践が行われた。さらに、浴衣を題材とした「きもの」文化についての「テーマ学習」教材作成準備のためのイラストが作成されるとともに、教材作成のための文化服飾博物館の資料および浴衣の染めについての調査が行われた。また、「外国の中学校での浴衣の着装を含む体験的授業実践を通して日本理解と文化交流の促進に貢献する」という目的の達成のために、作成した日本語版 DVD の英語版作成を試みた。さらに、海外への「きもの」文化発信のための教育プログラム開発の準備として、イギリスのラフバラに赴き、現地の社会人と学生を対象に英語版着装 DVD を用いた浴衣着装ワークショップを行うとともに、中学校での同実践に向けての打ち合わせを行った。これらの授業実践、ワークショップ実践の過程で、男女の浴衣について、サイズのバリエーションが必要であることが明らかとなったため、これらの実践経験をふまえて、日本の身体サイズのデータベースを参考に、特に、中学校における男物の浴衣のサイズについて検討し、浴衣と小物の準備を進めた。さらに、浴衣着装日本語版 DVD を用いて、「着方が分かる」「たたみ方が分かる」「産地が分かる」「縫い方が分かる」を切口としたホームページの作成、すなわち、インターネットによる e-Learning 教育環境の整備に着手した。

以上、本年度の研究は、本研究の目的に沿って行われ、着装DVDの日本語版、英語版の作成と e-Learning への応用、日本における浴衣を題材とした研究授業、イギリスにおける浴衣ワークショップなど、着実に成果が上がっている。来年度は、今年度の授業実践を分析・評価し、学習プログラムの改善を行なう。具体的には、「きもの」文化に関する調べ学習用の教材を作成し、生徒・教師が学べるようなテキスト教材を作成すること、実践的・体験的な活動を通じて浴衣の着付けがより効率よくできるようになること、着ることを通じて衣服と社会生活との関わりや服飾文化に対する生徒の関心の喚起に寄与したかななどを検証していく。この中で、きもの良さを内外にアピールできるよう、生徒の声を発信していく試みにも挑戦し、本研究を発展させたいと考えている。これと併行して、本教育プログラムを題材とした教員研修を行い、家庭科の授業導入への参考として紹介していく。授業の実施を希望する教員には、教育内容と環境を支援していく。さらに、海外の研究者と連携して協力校の選定と海外での研究授業を行い、翻訳したテキスト教材・デジタル教材、インターネットによる e-Learning 教育環境を利用し国内同様の授業実践と分析・評価を行い、日本での実践と比較検討する予定である。

2) 浴衣を題材とした日本での研究授業

横浜国立大学附属横浜中学校第 2 学年 A～C 組 117 名(男子 59 名、女子 58 名)アンケート調査の分析(2009 年 7 月実施)の一部と、同校 1 学年の授業(10 月実施)の感想を報告する。

中学 2 年生を対象として「きもの」(ゆかたを除く)の着装経験を調査した結果、男子では 8 割、女子では全員があると回答し、着付けを行なったのは「プロ」が圧倒的に多く、家庭において着付け技術の伝承がないことが明らかである。過去に「きもの」を着たときの感想では、「歩きにくい」「窮屈」が最も多く、動作性

の面では否定的であるが、「気持ちが高鳴った」「優雅な気分になった」も多く、心理面では肯定的である。しかし、「自分で着てみたい」と答えたのは、男子で半数、女子で7割であった。一方、ゆかた着装授業により気分の高揚がみられ、男女で半数以上の者がまた着てみたいと答えており、このような授業実践の有無が、今後の「きもの」の着装に与える影響は少なくないと考えられる。

1年生を対象とした授業実践では、ペアになって着付けし合う実践が行われた(Fig.2 参照)。授業後の生徒の感想には、「コツをつかめば簡単に帯が結べるようになった」という成就感の感じられる感想や「今度お祭りがあつたら着てみたい」という今後への期待が表れたものがあった。「難しかったけど楽しかった」「大変だったけど、きれいにできて良かった」というように、初めての経験に苦心しながらも、満足の得られた授業だったようである。「今回の授業で浴衣が着られるようになった」という声もあり、単なる物珍しさに留まらず、浴衣に対する興味・関心を喚起し、日本の伝統文化の一つとしての「きもの」を見直すという授業の当初のねらいは概ね達成されたものと考えられる。

以上のように、日本の伝統文化の伝承のための、浴衣の着装を題材とした授業の効果が見られたと推察されるが、本実践を通して、限られた授業時間の中で効率よく着付けの技術を習得させるには、さらなる工夫が必要であることが明らかとなった。また、着付けを通して何を学ばせるのかという視点を明確にし、家庭科学習としての本実践の意義について、再確認する必要性が認められた。授業時間の多くが着装に費やされ、着装についての振り返りや、互いに浴衣姿を見合ったりする時間が充分取れなかった点が課題である。今後は、本実践で明らかになった生徒の実態を踏まえ、より実効性ある授業プランを具体化していく方向で進めたい。

まとめ

本報告では、本研究の方法を詳細に紹介し、またその結果が本研究の目的に沿った内容となっているか検証した。また、中学校における浴衣の着装を題材とした授業実践時のアンケート調査により、授業での浴衣の着装が気分を高揚させる効果があり、日本の伝統文化の伝承に一定の効果があることが推察されたが、この授業で何をどのように学ばせるかについて、さらなる授業プランの検討が必要であることも明らかとなった。今後、研究方法において記述したように本年度の調査研究、授業実践をさらに発展させた教材開発、授業研究、海外への発信を予定している。また、国内外での学会発表等による研究内容の発信も積極的に進めていきたいと考えている。

なお、本年度の研究実践は横浜国立大学の教育デザイン研究会会誌、『教育デザイン研究』創刊号に紹介された。また、同学ホームページでも以下の URL で紹介されている。

http://www.ynu.ac.jp/topics/topics_09_085.html

謝辞

本研究を遂行するにあたり、下記の方の協力を得た。ここに感謝の意を表す。

大妻女子大学総合情報メディア教育開発センター 山田光荣氏、同大学助手 與儀由香里氏、同大学学生 松田美波氏、翻訳家 増田久美子氏、横浜国立大学非常勤講師 角田麻里氏、同大学教育人間科学部附属横浜中学校家庭科 葛川幸恵教諭、同大学学生 遠藤亮将氏、千葉県立流山南高等学校家庭科 仲田郁子教諭、文化学園服飾博物館学芸室室長 植木淑子氏、浜松織物染色加工協同組合事務局 曾布川之宏氏、二橋染工場専務 二橋教正氏、Design & Technology Department Nigel Zanker 氏、ラフバラ町日本人会 篠沢久二子氏、浴衣着付けプロジェクトに参加して下さった皆様